

全五冊曲亭主人編
 南總里見八丈傳第九輯
 十九之卷三拾壹丁
 下帙中

本編画工榊川重信

板元願入丁子屋平兵衛





南總里見八犬傳第九輯下帙中卷第十九端敬言
 本傳八文化九十一甲戌年第一輯五卷之綴り創り今全五天保八丁酉年上迄を慮
 二十四春秋を歴す其原作者の腹稿或は流傳の據り或は昨の我に感て趣を自分
 文を異りて體裁同いからざるも一にそを何とせん始は俗を旨とせざるに敢て
 以てこの故に行毎の假名書とて其真名書を一六七輯に二考し拙文唐山の俗語を抄
 録し且其訓を多く被義を知しむ要るは所為に似れをせし獨り孤陋す唐山の
 釋史小説を讀まば欲を諸生ある其全跡をば思ふ作者の老遠親切なるを
 行毎に具名する事の最に入意を始に添増す柳曲にすまはるる要るは其言をば
 く綴りぬ人未かやれさせ文の早表半裏の筆を減すをを知らぬも畢竟文字を
 婦幼の弄びよるる後やあれは故に風流の草子に語の取を吾師に教せんも又彼
 唐山の釋史小説の大勢なりしを絶すも其文の撰擬を要す然りとて坊間上寫本を

俗語の記復健言録の題の俗語を官言とすは余の素より疑ふ所なり
 吾人の枉々雅言を俗言とす又吾人の漢字の駢羅杜撰の筆を俗語
 創りし世人誤りて俗語を吾人の筆の中の本質なりと稱して憶せり
 長物語の供りし年を吾人の筆の中の本質なりと稱して憶せり
 俗語の記復健言録の題の俗語を官言とすは余の素より疑ふ所なり
 吾人の枉々雅言を俗言とす又吾人の漢字の駢羅杜撰の筆を俗語
 創りし世人誤りて俗語を吾人の筆の中の本質なりと稱して憶せり
 長物語の供りし年を吾人の筆の中の本質なりと稱して憶せり

唯のくも一日の厚の像を讀み如く之を俗語とすは余の素より疑ふ所なり
 俗語の記復健言録の題の俗語を官言とすは余の素より疑ふ所なり
 吾人の枉々雅言を俗言とす又吾人の漢字の駢羅杜撰の筆を俗語
 創りし世人誤りて俗語を吾人の筆の中の本質なりと稱して憶せり
 長物語の供りし年を吾人の筆の中の本質なりと稱して憶せり
 俗語の記復健言録の題の俗語を官言とすは余の素より疑ふ所なり
 吾人の枉々雅言を俗言とす又吾人の漢字の駢羅杜撰の筆を俗語
 創りし世人誤りて俗語を吾人の筆の中の本質なりと稱して憶せり
 長物語の供りし年を吾人の筆の中の本質なりと稱して憶せり

卷第 第十九	卷第 第二十	卷第 第二十一	卷第 第二十二	卷第 第二十三
第百一十四回	第百一十五回	第百一十六回	第百一十七回	第百一十八回
假捕使三路行兵 義兄弟兩林懲惡 大庵厄親兵備喪伴 石菩薩前信乃悟應報 大士路宿迎追隊 老僧袈裟示真四罰 忠侯臣死靈伴起本 孝子去京傳燈法服 里見侯白濱葬旅櫓 大法師德北門客情	八行靈王六増良主 九歳神童氏請花營 金破無後丙支有後 悅雪失望及遂望至 味客船水冤鬼沽酒 没波底海龍王刺仁 奇子海中與保探千金 普山筋難照文逢一將 渥美浦便船送紀二六 管領却禍鬼抑兵備	南條里見八太傳第九輯下 中惣目録九集第		

卷第 第十九	卷第 第二十	卷第 第二十一	卷第 第二十二	卷第 第二十三
第百一十四回	第百一十五回	第百一十六回	第百一十七回	第百一十八回
假捕使三路行兵 義兄弟兩林懲惡 大庵厄親兵備喪伴 石菩薩前信乃悟應報 大士路宿迎追隊 老僧袈裟示真四罰 忠侯臣死靈伴起本 孝子去京傳燈法服 里見侯白濱葬旅櫓 大法師德北門客情	八行靈王六増良主 九歳神童氏請花營 金破無後丙支有後 悅雪失望及遂望至 味客船水冤鬼沽酒 没波底海龍王刺仁 奇子海中與保探千金 普山筋難照文逢一將 渥美浦便船送紀二六 管領却禍鬼抑兵備	南條里見八太傳第九輯下 中惣目録九集第		



漏網



白子
釋氏



か 想ふ野計別々素頼堅削聲計... 既先鋒の頭人... 不便の僧... 野鬼... 堅削と目送る...

か 想ふ野計別々素頼堅削聲計... 既先鋒の頭人... 不便の僧... 野鬼... 堅削と目送る...

聲聞。人々不盡之端。此處。一箇。餘。牛。并。抽。索。被。牽。立。用。場。勇。力。
けれ。素。頼。親。の。懼。ひ。を。法。師。連。り。の。賊。僧。の。這。頭。置。バ。大。切。に。捕。
捕。折。り。脚。を。負。縁。ま。る。へ。今。未。一。が。牽。引。す。西。三。八。々。橋。の。由。由。一。
り。復。れ。そ。の。二。僧。僧。の。牽。引。と。就。言。星。嶺。師。の。一。箇。と。古。師。
も。身。と。起。さ。馬。の。僧。每。果。一。は。十。箇。の。法。師。一。箇。と。種。植。の。力。
自。明。一。箇。の。肩。へ。米。色。の。俵。く。載。て。被。擔。連。り。甚。敷。掛。聲。捕。り。て。西。三。
當。下。根。生。野。を。輕。快。の。勢。を。枝。の。向。り。危。頭。近。着。て。前。面。に。這。り。た。同。
然。茂。の。猛。火。を。背。に。十。箇。許。前。に。五。箇。並。立。て。る。勇。士。是。則。別。人。を。道。師。也。
野。の。二。大。士。之。左。右。は。二。箇。の。野。兵。各。持。桿。棒。を。以。て。突。立。腹。撲。と。來。り。者。の。聲。
護。と。同。せ。も。果。と。根。生。野。素。頼。騎。馬。并。り。以。聲。尖。銳。若。く。若。く。鳥。の。聲。

大衆と候て

俗。道。曾。遠。頭。小。庵。と。稱。ひ。ま。嘉。ま。の。列。將。の。提。の。與。と。人。の。邊。に。
を。伴。り。味。法。會。の。今。日。及。ば。ま。四。年。を。法。城。嚴。に。講。師。前。七。百。餘。許。と。集。り。た。
況。這。地。の。大。利。を。還。原。に。入。り。衆。徒。の。助。助。之。借。人。と。候。て。會。衆。之。見。や。
施。利。を。思。ひ。三。示。を。奇。怪。す。を。意。う。若。く。解。出。之。同。謀。に。候。て。謀。
反。の。計。を。執。り。も。捕。捕。と。領。之。を。れ。と。當。館。の。評。説。に。依。根。生。野。飛。雁。太。素。頼。が。一。
休。に。非。難。た。大。に。那。里。を。今。日。捕。隊。の。頭。人。只。我。一。隊。の。と。を。我。同。僚。と。高。言。す。
長。城。枕。之。令。協。利。聖。名。血。衆。日。經。被。切。由。隊。並。に。速。子。寺。の。加。數。六。兩。隈。を。捕。獲。し。
此。の。水。の。漏。れ。を。火。を。燒。せ。ば。大。に。首。付。と。他。の。僧。僧。の。取。り。や。考。へ。合。は。し。
了。然。進。ん。と。我。馬。前。に。撞。見。た。一。箇。の。漏。れ。を。捕。捕。り。後。陣。に。在。り。先。途。之。
一。箇。の。遠。る。出。り。馬。前。に。踏。ま。り。被。れ。と。道。師。の。と。冷。笑。た。て。
敢。て。入。り。長。城。義。兵。令。命。を。入。り。大。人。氣。を。充。て。怒。む。と。釋。ん。と。可。折。止。也。

現八の
二層の
八僧俗
二層の



大角の
八僧俗
八僧俗
八僧俗
八僧俗
八僧俗
八僧俗
八僧俗
八僧俗
八僧俗



西頭ル程之取名由來可經後之樹川之敵の所又とる東の茂林へ推穿て攻めて
後方と云はれ御前一定の人敷より引いて後隊兵より引かぬと云はる
討つるべきと月より程之堅固も亦之をまじり端々定め討つるに
教子、御高丸丸の御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
法師武者より引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
追及ひひ丸馬の最早引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
今領て還下る六日毎日浦那里の期ありかんと云はるに宜しと兵毎に討つて其
あつたの身人敷より根生野の後勤の勿論捕漏されど追及ひひ丸馬の最早引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
いひは捕僧丸伴任んに説き儘せぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
刷毛は吐く巧言と信客を短後年頭無遠里より追及ひひ丸馬の最早引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
あつたの身人敷より根生野の後勤の勿論捕漏されど追及ひひ丸馬の最早引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其

そのゆゑにねが那里の心安ら先當要の遠頭を敵の處まで折るに在り
思ふも争何せん樵夫のかた路のこゝ敵を極む松柏の枝を文の如く折るに在り
驛馬の進退難義なり御前より引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
従へり御前より引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
あつたの身人敷より根生野の後勤の勿論捕漏されど追及ひひ丸馬の最早引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
引出さる御前より引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
正を御前より引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
夫可わくま向樹陰に樹の枝を推抗し御前より引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
御前より引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
御前より引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
御前より引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其
御前より引かぬ御前より引かぬと云はるに宜しと兵毎に討つて其

2ヶ合茂林の自路熊徑苦滑は樹下周くて地易くぬを左右と西三町未ぬ
 と思ふ程に其頭の樹の下に人ありてある人々救はれ助けたりと叫ぶる短後由隊兵の
 とるる風騒々しく観たはるるを別人多く樹下を渡れを堂前並に同伴の法師出
 ま五六名藤首をて結相れて一個も漏れは老樹の幹を膝着れありてありて樹
 く短後より隊兵都て膝を漬と故て同も評きありて打撃を奪合喋りと短後
 此後其毎鳥海にささず暗に先那宗之解指上より大衆阿と成り近く車る隊兵の膝
 帯を奪首てて扱て殿前外宗と截毒木とて程に前後の樹蔭に敵ありて叫と鳴と
 る周の慶年済し叫びて叫びて知と突進しと顕れ出で里中も三個の犬去武者聲大川莊介
 有あり大田小文吾大銅現八器なりありと名を被る武者胆胆肩あまはて野兵何れ短後四者も過れ
 也士年一致進退烈く面を顕れ背を靡け短兵急を抜く奮勇正虎也
 羊と野と異るるは始よりと闘戦心なれば各人の心と近く打ちあひて自今敵の

雨の聲をゆくゆくと鳴々と驚き怖れて遊む樹に
 伴當別半と置旅の鳥籠を者のもれた敵の目もえとを皆に命を懸れんとて樹間に滑り
 ぬるも木の根に落ちたは皆く痛く者も壓倒れ蹂躪られ刺突を野兵何れ生拘るもさる
 けり開か中短後ハも躬方を四圍より復せんとて鳴るも短後ハも退後ハも現横
 ままも樹と寄る刀で下と打落し短後ハも中一中二回も打たれ短後ハも先樹の株
 膝を打て阿と叫びて又起るもあはるる大まの野兵何れ走鬼りも索と被る草居は
 時せ井小文吾の現分今よふの老漢の精ゆるとを思ふも俱に短後を責むるもさる
 崩れ小人作しや雨も結成り由緒も家臣親の忠死を賞するも首職美祿の意
 多う放僻邪行力を理義と思ひて心樹に似るも同僚も何人根生野飛雁素頼長
 城枕之介惻利と共信も遠足寺の住持徳用も後弟堅削伯の哄誘をて大居
 主の念佛供養とて非を成り猶も君命と偽借し僧俗鳥合の目入殺七我れ

推並に搦捕まけりしゆ。の計較の趣入の告りし知らる。今又悪僧堅削の拓
 かくの詳をよとゆゆり知る。那意僧の金銀を平候まゝ漫に這頭
 まし我れ既搦捕て爾とせし。況ん今ゆり及ぶも。大庵主の念佛徳親
 若れ先君先父の菩提力を干す。相教ひて一層の力を資金まかりし。是を告
 去て罪とて警戒を思ひてなせり。抑何んか心や忠やわと考る。冥罰越。觀面
 其身々の亡君亡父の瘞り出するも。むやむ思ふも陳言が。あや甚魔をいふ
 と迭代し責問へも。短後折傷の痛楚はの堪ざらぬ。當下堅削の悪僧の
 俱に揮聲戦して大士とやん。えんまを我れは持徳用の指揮を休む。已とせり。ど
 當隊は成りしむ。只懲えんともひのみ。真実大人們を敷搦んと欲せ。悪心
 引と勸解れり。亦短後の伴留列卒の生拘れり。威跪り顔。種々異口同様に
 陣をす。咄り松竹のやう。せし可。毎。這回。計較。六。至。も。干。し。を。情。由。を。知。れ。

ひと主命をいはる。非もく相殺すゆひん。いそ賢人直心。及。不。と。語。話。を。導。ま。り。

口説く。三。大。士。り。も。く。と。和。本。の。株。上。屋。を。截。り。其。外。の。談。を。大。田。大。師。の。意。

の。聖。削。の。指。標。を。不。光。徒。三。方。に。向。ひ。る。事。聖。人。分。明。の。心。許。る。な。大。庵。主。の

女。危。の。供。養。場。所。は。快。ま。か。う。大。山。大。阪。大。村。の。一。隊。修。く。庵。主。の。跡。好。て

大。塚。ま。か。の。勤。せ。ん。今。の。急。務。は。是。の。と。い。ふ。小。文。吾。點。頭。を。も。分。論。の。な。る。這。生。の

們。の。と。い。ふ。と。現。今。の。事。を。開。き。商。談。は。及。ぶ。と。一。個。々。々。の。首。を。割。り。後。安。ま。り。あ

り。逃。る。奴。們。か。り。ま。て。被。る。索。を。解。ん。ん。然。だ。い。盗。り。程。を。覆。し。仇。は。刃。を。借。り。

是。福。を。見。ん。と。思。ひ。ぬ。ら。と。言。ふ。は。社。合。推。柱。を。不。知。る。目。か。れ。と。も。大。庵。主。は

い。れ。い。ち。中。原。大。江。親。兵。衛。の。逆。將。素。麻。之。從。折。虎。徒。之。一。個。も。殺。ま。り。全。勝。大

功。あり。と。這。生。拘。庵。主。の。誑。違。り。但。短。後。と。惡。僧。們。の。供。養。場。所。を。奪。り。

田。々。大。山。大。阪。大。村。の。示。し。衆。護。を。儘。ら。る。る。知。り。か。か。と。誑。せ。現。八。威。眼。を

多設定は精妙之約言今番の陣戦は他們の如くは所慮なきに倣ふべし
朝の始に乘りて殺し他は主君を結城氏と志と結んで見殿の爲に早に
思ひし我を短慮多し鳴呼行くとて遠く他事なれば莊介小文吾再議
及に四個の野兵ありて経後軍前を生口と牽きとて
傷に似て一歩も運びぬ堅削の中生柄れ折片足折足言故に立か
禦の経後幸と馬の敵を捕りて殺す大樹より
をえりて二の野兵を下知とすこの敵の生口もれと皆殺すの難兵ありて
毒来て心但即休し因てまは僧は樹下に植まると淫服僧の旗を
り野兵ありて殺す候に柳の下の小文吾現れ経後堅削とす
馬と見先ありませと敵生口を僧と懸兵と牽き路とす塔所の茂林あり
本に經小道節を野木田根生野飛雁太系頼とす敵の僧俗名牧と生柄

らりて茂林の幹を懸しとす此の三大太とす
筒様とと解示と但は笑局とす井中道と即ち假討隊の頭人
経後大村大飼と生柄れと遠頭は敵多し似れ生柄毎を携同し
高一隊の兎走と唐主と捕縛と中途に埋休つと胸安とす
然も他の謀殺せんとす我の亦堅削自伏せ候
一隊の頭人長城地とす
持し神將軍と生口無
香野の神將軍と生口無

然るに... 八個の... 作... 権... 中...

助懐利心を... 先目と射... 扉... 相... 敵... 後... 助...

三浦里

の下

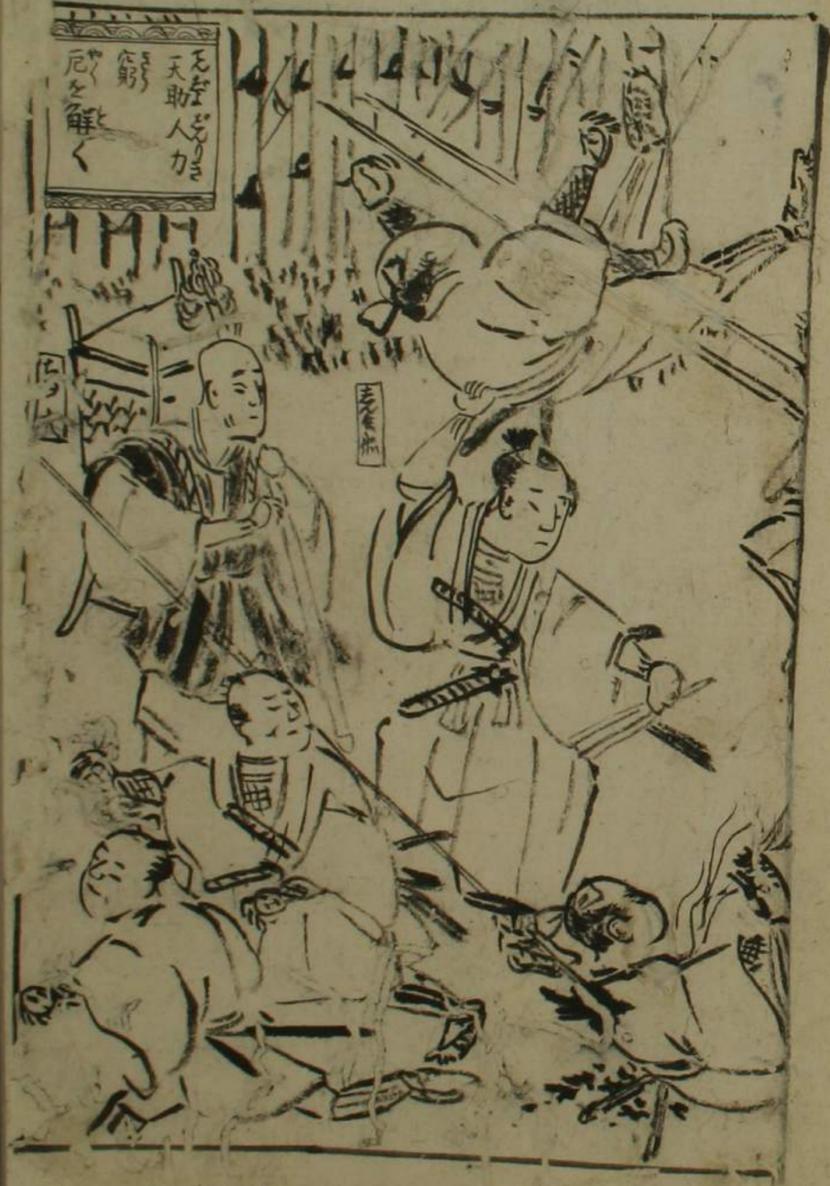
國

の... 呼...

野の... 程... 同... 去... 先... 道... 先... 個...

隊の西僧們が入む眉火刀の身へ向へて西勝樓地産倒る武具三精妙等復た
 推れし西僧們の皆舌を擗りて又立看る事ありて遂に三僧の徳用杖を
 西僧の合揚を輪々と西僧振武して西僧殺んとて鬼丸の信乃の透き身
 小松木を丁と破と變り流し相挑めり果被相命し何れ看官救し勝
 何と思入もあん知も信乃が徳用杖を三僧の武藝精妙等復た西僧の徳用
 信乃脱れし情地産倒る武具三精妙等復た西僧の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 年西僧高き安て欲も信乃と闘守りし西僧の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 川の東邊西僧文代四年西僧の敵を西僧難く共信乃の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 戦へし西僧利達し西僧勢を西僧難く共信乃の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 殿前し西僧亦敵の十の刃と丁と打落れし西僧の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 帮助し西僧亦敵の十の刃と丁と打落れし西僧の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た

十捕り漏り組禁れし端利馬上下西僧難く共信乃の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 二十餘年料理修行僧の時運好く西僧難く共信乃の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 水行と今西僧の宿方陸まきり路次を三僧の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 里まきりし西僧の宿方陸まきり路次を三僧の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 向て西僧の宿方陸まきり路次を三僧の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 怒り埋めし西僧の宿方陸まきり路次を三僧の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 大士の入里見の家西僧大江親兵衛に三僧の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 地と捕り漏り組禁れし端利馬上下西僧難く共信乃の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 西僧難く共信乃の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た西僧難く共信乃の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た
 西僧難く共信乃の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た西僧難く共信乃の徳用杖を三僧の武藝精妙等復た





天保八年丁酉春二月二十八日稿了
序目錄像者同年秋八月晦日方成

著作堂老先手高未

筆——福 硯 壽
大 吉 利 市